

ウエのうへ 天易真兮架空せし Site の綴のひとつ Blue'Z Evolution Hyper 文
 コン テンツ Bookcity じあて (<http://syiveeyh.g2.xrea.com/minez.mp3>) 文字をぞいずれ
 タップ Bluesharp の一秒 裂帛す あやしき問ふても 唯「小説」^{一ノノミ}と応^{コタヘ}る耳



眞實義の究竟くきやうを欣求こんぐし、心逸りつ、逝にしへの書の紐を解き、古澗ふるかれし章段めくを捲りて、

想い耽る時を過とごせるも、ふと指を止め、二つ文字に眼とこを留とどむ瞬。

幾星霜経し古紙ふるかみの、織維粗毛羽あらけ立ちてくつきり迫ばらかさ。活版刷りなる洋墨の幽玄なる凹

凸を、遙かに眺む。

過ぎし世を馨かほらせし昏き晝翳しゆえにて。羽根ペンやらインク壺、吸取紙やら革パッドなど、真鍮めくラ
ンブ乏しくば、それらの照りも深き色、ましてや陰は冥くらき玄、底なしに喪せ沈む。

常日頃見る品々とても、初めて見るかと覚ゆる鮮やかさ、想像すらせぬものを見たかの
よう、唐突はたにて、濃く強く晰はらかに審らかなる哉。

これも聖なる文字の力が機はたらくゆえか。ガリレオの勝利を見るまでもなく、かつて科学は宗教
に勝ち、人々は医療や生活を科学に託し、生命の誕生は偶然でしかなく、神は死にて、世は物的
な因果律でしかないというニヒリズムが横行した。

だが、今や科学は死にて、機はたらきが謳歌する。だが、それは古き神と言いうべきかもしれない。

もしくは法か。或いは、^{ダンマ}実証主義的で超越的な、精緻精妙なる真の科学か。

この二つ文字も、今でこそ、かような、刷られたインクの象りでしかないが、かつては荘嚴なる偉容の聖なる太岩などに彫り込まれていた。古代の人にあつては、岩に彫り込むことは、永遠ということと同等であつたに違いない。

^{まがみ}『眞神神統記』の第一書『太祖神』の第二篇『礎』の第一部『彝岳晒厨御』の第一章『究竟』の第一段『清明』の第二節に「太祖イージュ（※後註1参照）は語りて曰く、『清明たれ、龍のごとくに肯ぜよ』とぞ」。これに由来していた。

^{まがみ}『あい』と読む。眞神族の言語。固有の文字。フォントがないため、似た文字で代えている。

『ゐ』は「龍」を顕す。『い』は聖なる文字で、言語によって睿らかにされる意味を持たない。『あい』と言うとき、一般に「龍肯」と訳される。

この大いなる叡智について語ろう。

※釋註1 太祖イージュ

初代王彝玖邇の祖先。紀元前五万四千年前に眞神族をまとめたという伝説上の族長。巨軀で獅子十頭を屠り、巨象を素手で斃したという。神彝亞晒厨御の末裔であるという。

これを序叙とする。



太陽の薔薇

激しい雨の中、彼女は立っていた。未だ七歳だったはずだ。
下瞼が堰のように、あふ 溢れ零れそうな涙を震え抑えていた。だが、その双眸は凜としてい

る。燦めきを溢れさせるその揺らぎには、毅然たるものがあり、僕をたじろがせた。

光は靨色の螺鈿のようでもあり、金属や鮮やかな化学反応のような青い燐光のようでもあり、爛らかに燦めく揚羽蝶や、燠火のよう爛々たるモルフォ蝶、ミヤマカラスアゲハのようでもあった。

あまりにも睿らかなる青・蒼・碧・藍・紺・浅葱・紺碧・群青 それらあまりにも深い奥なる^{あき}晰らかさ、海の幾層もの捉え難い青・蒼・碧・藍・紺・浅葱・紺碧・群青のような精緻なる立体モザイク、Brilliantな光々燦々、揺らぎ移ろいあざやぎ耀き、土耳其玉の碧バビロンの城門の真青 瑠璃 (Lapis Lazuli)、チュニジアン・ブルー、サファイア、フレンチ・ブルー、コバルト・ブルー、あたかもひとつひとつが太陽のごとくコロナの炎を随え、晰らかさの炸裂のごとくに熾り耀く。

熙々^{あき}と爛めく奥の奥なる燠火のごとくに炮烙しつつも、奥なるにつれ、より炳焉^{あきら}かとな

りつつ、さらにその奥にも燦せる青は、赫奕たる真のアイデアの燦らかさで燦く。

天国の、白く熙く大聖堂の、光の薔薇窓のFlameをなしていた。

眼の碧さは虹彩あお こうさいと云う、瞳に放射状の縞目の文様をなし、瞳孔を調整する筋肉の一種に因るものだ。虹彩の色素が少ないと、青い光線が吸われないまま亂反射し、それゆえに生じる。

彼女の虹彩はダイヤモンドのように美しかった。虹彩の亂反射が捉えられないほど眩いのは、虹彩を蔽う角膜おおと、角膜と虹彩との間にある前眼房を満たす眼房水とが、尋常ならざる透明の晰らかさを持つことにも因る。

喩えるならば、湖面から水深一〇〇mの底にある砂粒の、ひとつひとつが表面の凹凸の
一々を、精緻な解析度で明晰できる透明度。人間が一秒たりとも、呼吸をすることの
かなわぬ、高純度の鮮烈な純粋性。

真の真なる真實在性の本質（イデア）それ自体である自然じねんほうに法爾、究竟なる一切原理である。

炯々たる燦熙の睿らかさ、僕は射抜かれた。

ありとあらゆる一切の何も彼もはかくして生まれ、次元と時空とが生じ、数千億兆、いや、無際限なる数の宇宙が生まれ、僕らはこの世界に放擲された。僕丈ではなく、この経

験をしていない僕以外の人々の意識もこのときに生まれた。未来の人々の意識は言うまでもなく、過去のすべての人々の意識も遡及して、このときに生まれた。

第一部 方法序説

第一章 眞神族

まず、その前に、偉大なる眞神人たちが何処から来たかを述べておきたい。すべては受け取られるままの事象（現象と言うべきか）に依拠しなければ為せないから。

眞神族が日本へ涉つて王朝を建てたのは、神武大帝生誕の二年前、かむいやまと眞神暦7367年の戊辰年甲寅月朔（紀元前713年1月1日）とされ、第三十六代王神彥彌眞斗の時代である。上陸地が現在の眞神郡である。

その発祥は紀元前五万四千年以前に遡る（古代エジプト人の祖先が現在のエチオピア連邦民主共和国、スーダン共和国あたりから移動して来たのが紀元前三万五百年頃、定住が紀元前一万二千年頃と言われる）。文献資料のみで、長い間、伝説の域を出なかったが、最近、南アフリカのナミブ砂漠の洞窟で眞神文字が発見され、その顔料に使われた植物の分布年代と、生贄と思われる

動物の遺骸の痕跡から、放射性炭素年代測定により、その年代が確認された。

ナミブ砂漠は世界最古の砂漠であり、ナミブとは、その地域に住む人（サン人）の言葉で、「何もない」という意味である。サン人は遺伝子解析の結果、人類の祖先、最古の人類とされている。

眞神族はその後、紀元前二万八千年頃から牧畜を始め、紀元前一万四千年頃に農耕を始めた（古代エジプト人ですら牧畜が紀元前一万年頃、農耕が紀元前八千年頃）。

農耕作業は独りで行うよりも、集団で行う方が効率良い。一人の仕事が一だとしても、十人の仕事は十ではない。十五であり、時には二十でもある。百ならば三百や四百かもしれない。

その理を覚り、眞神族は集団をなし、集団が大きければ大きいほど、富を生むことを知る。灌漑や貯水などの土木の技術や、種蒔きや刈り取りの時期を把握するための天文学も発達する。

又、人口の多さは軍力をも保証する。古代エジプト王国は肥沃な広い土地と、ナイル川の水とアフリカの日光とに恵まれ、巨大な農業国家となり、大人口を支えた。周囲の国に対し、圧倒的な人口を誇り、巨大な軍隊を編成した。兵士らは縦に百人、横に百人をならべ、一万人方陣を以

紀元前八千年頃（眞神神統記に拠る眞神元年、西暦で言えば紀元前8079年）、遂に王朝が建

彝玖邇の系譜は、彝之家として現代まで続くことになるが、イ(彝)は聖なるものを顕し、当該する概念がないため、ナミブと同義ともされることもある。

12

ためであると言われる。

莫大な富を持つ眞神族は征服の対象とされた。エジプトの王やアツカドの王が彼らの富を狙った。彼らは大陸を東へ移動した。それは東の涯に聖なる文字と同じ形をした岩山が屹立すると聞いていたからだ。

日本海を渡って、その聖なる山をも見つける。それが眞神郡の眞神山である。

時代が下ると、東夷として、大和朝廷の征伐の対象となった。巨万の富を狙うものであった。やがて朝貢する関係となる。源平合戦の時代や戦国時代に幾度か苦難を迎えるが、頼朝や家康の時代は特に過酷であった。思うに、日本の理不尽なまでに苛烈な管理社会は武家の時代に始まったのではないだろうか。

江戸幕府の施策は屈辱的でもあった。百貫の金塊を毎年納めるといふはよしとしても、言語や文字の禁止、文物の焼却、聖地眞神山の封印は民族の尊厳を毀損した。理由は、怪しげな靈威で、都の帝の神徳を曇らせたというものであった。

已むを得ず、眞神の王家はその時代、古代に支城として使っていた尖刀石山という、大岩を積

み木のように積んだ砦に、屋敷を構え、町を作り、一万年来の戒めを護って只管時節を待った。

そして、予め時勢を見抜いて幕末以前から長州藩と誼を結んでいた眞神人たちは、明治十三年、遂に自由を勝ち取ったのである。眞神の御山に還った。

第二章 龍肯

龍肯とは、龍のごとく大いなる肯定、という意味である。

それは倫義を、人の論考を軽々と凌駕するが、まさしく龍神の面目である。人間を遙かに超えた、超弩級に巨大な、聖なる肯んじである。

広大無辺な全方位的な肯定、無制限に現実そのままに。

言わば、無空で、現実でしかない。

無際限なる全肯定、究極なく自由奔放、一切の差異もかたちもなく、（そ、う、い、う、差、異、も

かたちもなく、又差異もかたちもあると言ってもやぶさかでなく）捉え難い。捉えようもない。捉え方がない。「捉え」がない。又はその逆だ。捉えずにすることができない。捉えぬ方途がない。捉えぬという仕様・様式がない。「捉えず」がない。

なぜならば、捉え方がないことも、一つの捉えだから。

これはLogicの堂々巡りだ。原蛇の喩えで表現されるが、それについては次章で叙述しよう。

さよう、これはLogicを前提としている。Logicという方法論が正しいかどうかを知らぬにもかかわらず。それよりも前に、我々はLogicを知らない。

かつて、ライプニッツは言った、「なぜ、非存在ではなく、存在なのか」

答を知る者はいない。そして、よく考えれば、それはすべての存在者（≡考概。※釋註2参照）に当て嵌まる。

我々は「なぜ、非Logicではなく、Logicなのか」に答えられるであろうか。不可能だ。

人の知性も動植物と大して変わらない。存在者の知性は皆同じだ。

我々はよく知らずに使っている。経験上で、確認ができるからだ。だが、それ丈である。考概に本質はない。すべては代数だ。答を導き出すことはできるが、代数は代数でしかなく、アイデアでも本質でもない。むしろ、Logicの及ぶ限り、その範疇においてのことである。

考概を使うLogicalに説明しても、虚しい。結局、我々はLogicが何であることを知らない。

Logicの定款に遵つても、実用ではあるが、究竟は何處にも逝き着かない。捉えがないから捉えがないという捉えもないという論理も亦復如是。

そもそも、思考は（我々の見る現実が我々の見たままだとすれば）化学的に起こる電氣的発火現象（インパルス）でしかないではないか。

さようなものを知覚する存在者など、あり得るであろうか。いかようなる存在者であっても、“知覚”している、“知覚”せざるを得ない、“知覚”せぬこと能わざりしそれを、殊更に知覚するなどということが。

一切は既に龍肯である。龍肯に到達することはできない。龍肯に到達しないことはできない。

※釋註2

存在者Ⅱありとあらゆる・なきとなからむ、及びそれら以外の一切。時空や抽象概念も含む。実存的には考概と一致。

『存在者について問われ、ソロン教授はこう答えた。

「人・獸類・禽類・爬虫類・両生類・虫類・ユーグレナ藻など・ミトコンドリア・アメーバ・草木・水・火・土・岩・金属・天・海・空気・星・月・太陽・宇宙・光・闇・時間・空間・非存在・無空、それらの超越、又それら以外のものの、及び概念にないもの一切、併せてそれら以外のもの、ならびに……」

ゾルゲ卿は顔を顰めたが、何も言わなかった。（『眞義塾沿革史』より抜粋）

第三章 原蛇の真咒マントラ（又は陀羅尼、又は偈頌ガーター）

いにしへより次のような原蛇の偈頌が詠唱されていた。眞神ミの御山の磐にも刻まれている。究竟のところ、すべては捉え難いと云う。この偈頌はその消息を詠ったものと思われる。『捉ふ』というのは、理解することと同義であると思つてよい。

聖なる原蛇の環よ 尾を咬む蛇は喰らふや喰らはるるや
捉ふとても捉へ難し 存在者ものら皆悉く それ捉ふゆゑ
而れば 人 堂々果敢すべし 義しきと以ふ爲すよし

（※釋註3参照）

Logical思考の法則は、必ずこの二律背反（アンチノミー）に陥るような仕様になっている。

わざとではないかと思えるくらい決定的だ。

我々は一切が未遂不収（未だ着地を遂げず、いかようなかたちにも収まらない）で、いわば放置（捨置除却）の状、この現状のまま、ただ、現実（それがどのようなもので、いかなることであるか等々は一切不詳不明のまま、すなわち、未遂不収）があるばかりである（真実はない、ただ、現実がある丈である）、でしかない。

我々は考概をわかっていて使いこなすが、ただ、納得している丈で、まさしく色即是空、空即是色なのである。

ウロボロス
ギター

※釋註3 『原蛇の偈頌』意識

ウロボロス
ギター

『原蛇の偈え』とは、紀元前七世紀の神仙イカムの『原蛇の偈頌』に由来する。偈頌の意識は次のとおり。

『聖なる原蛇の環よ、自分の尾を咬む蛇は喰らうのか喰らわれているのか。』

知られざる宇宙の初めには過去も未来もなく、因果律もなく、法則もない。

何が起こることも可なりという無際限自由奔放。

存在者はその末裔である。

さればこそ、人は堂々と果敢に行動すべきである。

義しいと^{おも}いうことをなすしかない』

なお、この偈頌は時代の知識を超越していることから、オーパーツ (out-of-place artifacts) の一つに数えられる。

第四章 存在と考概と特性と差異と

存在者とは、実存に於いて、直観に従えば、考概だと我々には思える。

むろん、眼の前に、客観的に存在する対象が実在していて、それを観察して考概が生じ

ると考えるのも自然だが、我々は自分が客観的な存在者と対峙している姿を、直截的に確認する方法がない。

だが、直截ならば、それは真実なのか。

我々は直截と言うが、しかし、直截とは何かを知らない。

なぜ、非直截でなくて、直截なのか解らない、ということは、そのフォルムがどうやって選ばれたかを知らない（どころか、そのフォルム以外の在り方すら、想像さえもできない）。ということは、そのフォルムを理解しておらず、只受け取ったままに受け取って使用する丈で、内容も分析できず、ただ、納得という心的な現象丈が漠として在り、理解も解釈も皆絶で、すなわち、直截ということの内容を理解しているとは言えない。

それをよしとしても、対峙の構図は、やはり確認のしようがない。

客観的存在者と対峙しているかについては、他人に見てもらうか、もしくは他人を見ることで確認できる、と思う人もいるかもしれないが、その他人という対象が客観的事実かどうか確認のしようがないことを忘れてはならない。

先ほど直截丈を例示したが、実はすべての（具象抽象を問わず）考概について、同じことが言える。一切の存在者（考概）には本質性・イデア性がなく、現象に過ぎない。

それらは（我々の直観的上は）それぞれの特性を以て存在を顕在させているが、その特性には本質及びイデアがなく、特異性であり、すなわち、差異でしかない、と映る。

差異とは何か。同じだ。

我々の直観上は、ただ、心的な現象「納得」がある丈である。

第五章 叙無記、又はBlues harp

さて、天易真兮くんは龍肯を畢竟に言えば、このBlues harpの音であると主張し、無造作に、破れたジーンズの尻ポケットから取り出し、ぞんざいに一吹きするわけだが、それを「あゝ、よくわかってるよ」などという顔で、私なんぞが、「むろん、一切の差異が

無空であるならば、それもありだ。すなわち、「なあんて言おうものなら、いや、さあ、大変だ。」

彼は平然と、秋の風のようにこう言う、

「いや、それも、じゃない。それしかない。それで何がおかしいか。おかしかったら、何だと言うのか」

そして、例の、あの喩えを出す。

龍峯寺僧 龍鳳 公案録「叙無記」肇輯第十七段

ふみのこころいづく

眞曰、文趣眞奚焉かんすにしあるとも、究竟也

龍曰、卷子皆同じう究竟ならずや

このふみ

眞曰、佳文究竟の所以（※釋註4参照）

眞巖が言った「この書に何が記されていてようと、この書は究竟の書である」

龍鳳が言った「ならば、すべての書が究竟の書ではないですか」

眞巖が言った「それこそがこの書の（特異性であり、）究竟であるがゆえんである」

これは龍峯寺の僧、眞巖が弟子、龍鳳が龍吞神社に奉献した公案録「叙無記」肇輯第十七段より抜粋である。

真兮は言う、

「まず、Logicが信用できる真実であると措定して、言えば」

彼はそこで言葉を切って、信用も真実も納得でしかなく、本質もアイデアもないが、と附言した上で（すなわち、論理は論理上、論理によって、その呈を成していないと規定される。論理が否定されれば、論理には論理上、何らの問題もない）、

「Blues harpのサウンドは、我々の直観上、ただの実在で、何も語らない。是でも非でもない。ただの現実だ。龍肯は特異性がないことではない。なぜなら、論理的には、特異性がないことも、一つの特異性だからだ。どのような規定もない、というのも、一つの規定

だ。何の規定もない、という規定もない？ 解決不能。原蛇の喩えだ。未遂不収だ。とても斯くても候。途方もない自由、ただの現実。

ってことだ。

論理が正しいとすればね。

だから、結局、このサウンド丈が、唯一の、龍肯なのさ。

渡来の日常雑器が見立てられ、寂びてる凍えてると言われ、尊ばれる侘び茶と、何處か似ている」

「いや、まったく違う話だよ」

「そのとおりだよ。だから、Blues harpなのさ」

※釋註4

異本眞神社眞倉蔵版には「佳文特異究竟の所以也」とある。其解釈同義。

第二部 この人を見よ

第六章 天易家の茶室に天易真兮が只管に坐す事

あまやす

あまやすまことや

蕭々と竹林を撫でる皐月の雨。

茶室に坐す。

炭を熾し、茶釜を掛けた。炭斗から炭をり出す。香を炉にくべた。野雁の羽箒の下に隠れていた桑柄の火箸を指にはさむ。湯気が立ってきた。碗を攪く。棗を開けた。竹の茶杓を搜す。白竹一本樋の、細身の中ほどに、竹の節がくるよう詠われ、少し持ち上がったような、蟻腰という見掛。丁寧に漆拭き爲れたそれは棗を包んでいた裂の傍らの畳の上に落ちていた。

沈として影も動かぬ茶碗の口縁に茶筴が架けられている。

念じて誦すは、

「ぐわてゑゐぐわてゑゐ。ふわらぐわてゑゐ。ふわらすわんぐわてゑゐ。ばふでゑゐすぶわふわ」

般若波羅蜜多心經の真髓奥義の心臓たる神咒であつた。香炉の煙もか細く儂い。

雨強まりぬ。

露地の蹲踞の水を波紋させ、苔に滲みて深くす。葉桜の幹の斑紋のような地衣類は息吹した。

弥生の候に紅白の鮮やかを見せていた梅の幹のも。山毛櫨の枝に生う鬚のような緑の着生植物や

シダや絡みつく葛類も、色彩をよみがえ甦いやおいらせた。

飛石は濃くなる。

歳月とともにやや寡れた青畳の匂いも、微かな黴と苔の匂いとともにそこはかとなく醸された。

あたかも鰹節を薄く削つたものを湯にすうつと一度又通して取る出汁かそけのように清んで幽きもので

ある。

志野という茶陶は長石釉という釉薬が白くなり、そこへきめの細かい貫入、柚肌、小孔があらわれ、含まれる鉄分によって火色という赤みをほんのり泛ひろべる。

されど鉄分と言うも、実際、薄紫や薄桃色がかつた五斗蒔粘土やもぐさ土という白土が使われ、

鉄分は少なかった。したがって、緋が泛ぶのは、釉の少ない塗りの際や口縁である。

希少な五斗蒔粘土は丁寧^{みずこし}に水簸され、練られ、ねかされ、土味を醸す。成分は石英、カオリン質粘土、長石。化学的に分析すれば、珪酸、アルナミ、鉄、カリウム、ナトリウムなど。

もぐさ土は、お灸のもぐさのような風合いがあるから。花崗石や流紋石などを含み、シルトを含有する。シルトは粘土と砂の中間のような質感を持つ。

ここに端座する真分はかつて語った。

真理はすべて脆かった。疑うことがいくらでもできた。すべてが無条件で何の根拠もなく信じられていた。そんな脆弱なブロックで構築された体系の建築だった。

すべての認知（認識・意識）の素粒子、つまり、すべての証左（すなわち論理的証左）の構築要素である 考概 は、すべて思い込みで、それだからそれなんだという、無条件な是認の下、感覚的な擦り込みで馴染ませて、納得という心的な現象を起こさせた結果でしかなくて、何の証左にもならない、ただの現象であった。

真理は死んだ。現実丈がある。だが、現実とは何であろうか。真理が死んだので、本質や特性では語れない。差異も使えない。だが、逆も亦真なり。語れまい、使えないというも、本質や特性であり、真理のうちだからである。

考概は、ただ、納得を生んでいる丈であった。解釈に真の建築はなく、ただ、唐突に暴虐的に、納得によって支えられている。理は欠片もない。理解も了解も在り方などなかった。

現象はあっても、還元はできない。何をどうすればできると言うか。そもそも、やり方がない。生活はあるが、*Logos*（ロゴス）がない。いや、ロゴスという言葉の解釈にもよるが。畢竟、我らが未だ離れられず、未来には唾われるであろう認識方式は解釈学の範疇なのだ。

彼はかつてそう語った。

「死んだというのは、正確な言い方ではない。そもそも、真理は生きていたことがない。過去の定説も亦然り。一つの解釈という架空、現実的ではない」

あまやすしんずいのすけざう えもん

天易家第二百七十二代当主、天易眞髓之丞左右衛門の曾孫である。

尖塔のようなウィザードハットの山は折れ、広い鍔は波打ち、腰まで蔽う長髪、スキニーな十

六オンスのジーンズのチャックも蔽う長い顎鬚頬髯口髭、片眼鏡を掛けてキャラバッシュパイプを咥え、海島綿のボルドーのワイシャツの上に、水色の縹子のミリタリーロングコート、金糸の房飾りや飾り紐や肩飾りなどで満艦飾にしてその袖には大振りなカフスを付けていた。

茶室の躍り口には弛んだ蛇皮のロングブーツが脱ぎ捨ててある。靴は何も語らず。静寂^{しかない}只有。

茶を喫し、独りごつ、

「考概本質在らず。忽焉、ただ、納得あるのみ。ただ、現実^{のみ}耳。現実耳にて、他在らず。すなわ

ち、現実の何かたるを知らず。人は、ただ、生く。答なしとすらなくも、ただ、努めて生くべし。

とは言え、納得というも、磨り込み馴染ませるにしかずと直観するも、それすらも考概にして

亦、論のための論を絡繰りする空架、戯論にしかず。砂上城の大空論の大伽藍、虚し。

そもそも、ないというも一つのかたちにならず、かたちなしと言うとても、それも亦、一つかたちにしかずとせば、『原蛇の喩え』のごとし。

すなわち、尾を噛むウロボロスは喰らい尽くすか喰らわれ終わるや、奈何。知及ばずあり。奚ぞ知るや。知る由なし。

答なく、解決不能、現状の俛、中途の俛、宙ふらりんの未遂不収。

そう言えば、いつぞやそんな論を交わしたことがあったか」

第七章 彝之家の彝之べ裂が彝龍之裂を問う

眞神郡に住まう眞神族の王家、彝之家の第五百二十四代当主、彝之爲弓草飛也いのいてふひやの曾孫、彝之べ裂は紺紺に、皺くちやよれよれの袴を穿き、胸を開け、帯に木刀を差し、片膝を立て、

真谷の前にぞんざいに坐す。

「するつてえと、我らが古来真義、龍肯つてえのは、いったい全体、どういふことになるつてんだ」

開けた胸をぼりぼり搔く。傍若無人な振舞。

べ裂という変わった名の由来は、刀のような形の眞神山の頂上にある、刀型の磐代に縦裂きに

いりゆうのれつ

裂けた彝龍之裂という亀裂に由来する。聖地にあるその裂け目は、神聖の中の最奥の神聖で、
神

いあれずを

彝龍岬厨御の示す究竟真義の真髓、龍肯（又は『あい』）を象徴する自然文字と言われる。

「さあてね。

現実のことだからねえ、解答集があるはずもなし。

人の生きざまと同じさ」

「善哉善哉善々哉、あはははは。結局、何も知らねえつてのと、一切変わらず、つてえことだ」

べ裂呵々大笑。真分欣然と微笑み、

「無難な線を言えば、古来、言うよう、人は堂々と果敢に生きよ、義しいと思うことに勉めよ、
つてところかな」

鼻先で笑う。

「ところで、何で我らの至聖地の、岩のただの亀裂でしかないものが神聖な文字のごとく扱われ
るのか」

「ただの自然の亀裂だからだろうね。志野焼の景色、柚肌の小孔や貫入や火色みたいなものさ」

カム

「なるほど。だから、俺はぞんざいなのか」

第八章 天平普肅の愉悅 ライブハウスを併設する古書堂及び書肆

蕭々と降る雨。

窓からその憂鬱を眺めていると、寂しげな、解放されたような気持ちになる。自然と物思いに沈んでしまふのであった。

あまひらふしよう

天平普肅は難久簀町で古書を蒐集し、これを販売しながら、又書肆をも運営している。書籍を愛し、その紙質や活字や装幀や製本を偏愛していた。

実家も畝邨村という眞神郡のうちだが、難久簀も郡のうちにある。街は神中洲を中心に場末的で猥雑な、小さな繁華街があり、龜瀧湖に繋がる川が流れていた。

真今の主著「人間存在の実存的分析による存在論考『空』」を卜梓した出版社も、ここである。

この一冊で、弱冠二十五歳の青年は眞神族の思想の中心的存在となった。古代から天易家は天文占星の学者の家柄なので、知的世界の信用度は潜在的に高かったこともある。

蒼蕭は同級生であった。彼もまた真兮同様、変人のうちである。

長めのマツシールムカットで、サイケデリックなフロックコートを着て、ベルベットのシャツの襟をベイズリー柄の太いタイで絞めていた。モロッコ革の室内履きを履き、真空管アンプのチューナーを通してシタールのレコードを聴いている。マラケシュのスーク（市場）で購入した刻み煙草を長いパイプで吸い、和綴じの古本を玩味している最中であった。

アンティークな檜のテーブルには刷り上がったばかりの蔵書目録が置かれている。満足気にそれを眺めた。装幀の皮革は最上級品だ。手触りや質感、香り。すべてが高貴だ。

その角や背表紙には子羊の革でデザイン的な補強がなされ、味わい深いものになっている。

「これほど贅沢な目録もあるまい」

今日あたり、フィレンツェの古書店から、修道僧の手になる彩色の羊皮紙本が届くはずであった。それこそ、その店の目録から選んだものである。

さような都合から、彼はよく手書きの手紙を諸国に送っていた。レターヘッドに家紋の入った用箋を使い、各国語の流麗な書体で書く。メールでも電話でもない、正式は連綴方法であった。

フィレンツェと言えば、世界最古の薬局があり、行く度に石鹸とハンドクリームとを買っている。手を美しく保つため。爪を磨くのは趣味でさえあった。

「ふうふ」

意味のない歎息とともに、机の上の書きかけの楽譜を見る。

インク壺に羽ペンを差してから五線譜に、さらさらと書き加える。幼少時からピアノやバイオリンを習わされていた。嫌だったが、いつしかクラシックに興味を持った時期もあり、いくつかの楽曲や交響曲を暗譜している。

指揮者の真似事をした時期もあったが、到底、自分には無理と悟って、早々に転向してしまった。

反動か、中学（小学生の時期も少し含む）から高校に掛けてバンド活動をした時期もある。書肆の地下は古いライブハウス跡で、今では、貸ステージとして使っている。

「今日も、叭羅蜜斗は来ているはずだ」

同源叭羅蜜斗は生まれながらのパンク・ロッカーで、中学時代から高校時代にかけて、いくつかのバンドを渡り歩いていた。トラブルを起こし、すぐに辞めてしまうのだ。

普簫らと組んでバンド活動をしていた時代もあった。しばらく活動していなかったが、最近、自分のパンクバンド「非」を創り、地下のライブハウスで珍しいことに、練習というものを実行している。

「巧くならない方がいいのさ」

彼はそう言って練習などしたことがなかった。だが、時代が変われば、直観される真実性、ヴィヴィッドを感じるもの、感覚を甦らせるリアルの質も変わる。

「それもまたよし。変わるものは変わるのさ」

根拠もなく、適当なことを言う。そういう奴であった。

「だが、それがいい」

そう独りごち、再び譜面に向かう。『青龍門』という曲は真分の名著を荘厳するために作曲し

ようとしているものだ。バビロンの青き門に中華門のような屋根を重ね、ガウディのような有機的に歪む、原始生物のような建物を夢想してそれをハーモニーで現象させようとする試みだ。門の壁には、生きたカメレオンや翼ある牛や龍や獅子やユニコーンが装飾される。サイケデリックな感覚もあった。どこまでも終わらない装飾の繁文縟礼。

「終わりはない。

答はない。

どのような結論にも着地しない。

ヘーゲルは反対をも呑み込み、無際限に止揚して逝く弁証法こそが極みない最終的な答だと思った。しかし、それは解決をもたらしなかった。カントは限界を定めてその中なら、その限界内限定の真が得られると思った。しかし、疑念は噴出し、解決にはならなかった。

ニーチェの神憑りな箴言も、現象学的手法を用いた（手掛かりとした？）ハイデガーの存在論も、また未解決を志したデリダの差延も、世間の疾風怒濤のような土石の大暴流に呑み込まれ、跡も残らなかった。

解決しようと思うべきではないのかもしれない。しかし、そう思うことが既に解決への志向を動機として孕んでいる。

いずこへ免れるべきか……遁れ方があろうか……

レコードを取り出し、古いジャズを止め、真鍮管アンプから流そうと選ぶ曲は、

「『Pumpin' Jack Flash』にすべきか、デュランの『Blowin' The Wind（風に吹かれて）』にすべきか」

パイプを燻らせ、天平草肅は愉悅した。

第九章 般若波羅蜜多心経

家が真神郡龍吞村にある貞観正國寺なので、名前の由来が心経であることは推察のとおりである。1977年の初期パンク・ロックのようなスパイキー・ヘアを金髪にして破れたTシャツに

どうげんばらみと

安全ピンをやたらに刺し、スキニーな黒革のパンツを穿いた同僚ハロー蜜斗は暴力的なエレキ・ベースの演奏を止め、アンプのスイッチを切って言った。ピストルズ時代のジョニー・ロットンを思ってくれば間違いない。

「普簫のところでコーヒーでももらうか、いや、バーボンでもいいや」

彼の名を檀家の中には不遜な不敬なと言う者もあつたらしいが、ハロー蜜斗にしても迷惑な話で、子供時代はよくからかわれたが、住職は一向気にしなかったらしい。

どういうふうにかからわれたかと言うと、これまた眞神らしく、哲学的な含意を以て、おまえの名前の意味を言えと。不可説の仏教奥義を言えるはずもないことを前提にからかうのであった。あゝ、どうしてそれが言えようか。今でも回想するも、歳とともに感慨は変わった。悔しさよりも純粹な疑念へ。

「ガキの頃からよく言われたが、どういう意味なのか訊かれても答えられなかった。ぎやうていぎやうてい……

いったい、何だ？」

かつて一度、父親に訊いたことがあった。すると、父は古い眞神の神仙の詩を引用し、こう詠うのみであった。

「かたちなきもの　かたちなきとふも　かたちにしあらば　かたちなきとふをいなやとふとも
またもかたちにしあらば　いかにせむや」

意味不明。

もしかしたら、それが全体的な初期パンクに彼を駆り立てたのかも……とは考え過ぎか。

叭羅蜜斗が上がって来ると、沈むように坐っていた普蕭は何かを思い出したような顔つきになった。

「あゝ、よく来てくれた。お蔭で忘れていたことを思い出したよ」

「何だかわからんが、そう思うなら、コーヒーの一杯もご馳走してくれや」

「あゝ、いいとも。そのスターリング・シルバーのポットに、いっぱい入っている。まだ熱い奴だ。フレンチ・トーストも温かいよ。シナモンの粉があるから、好きなら使ってくれ。よかつたら葉巻も」

注いで飲むと、

「で、何を思い出したんだ」

「貞観正國寺さ」

「うちか」

「あゝ、古文書を借りたんだ。おまえの親父さんも相愛わらずだな。日本の研究者が借りたいと言っても絶対に貸さないが、同じ眞神族なら僕のような素人研究家にも貸してくれる」

「謙遜するな、おまえは一流さ。でもないか、忘れちまうくらいだからな、あははは。いや、それでも、おまえは相当な大家さ」

「適当なことを言うな。ふ。君に何がわかる？ まあ、いいや。誰しも所詮は何もわからないのに、適当なことを言っている丈だからな。」

「さあさあ、そんな無為な言辞はどうでもいい、思い出したのは、この小さな巻物だ」

「汚えな、何だ、こりゃあ」

「百万塔陀羅尼の一つだ」

「と聞いても、何一つわからんが」

『百万塔陀羅尼』とは、奈良時代の称徳女帝（在位764～770）が乱の平定のために戦没した兵士の鎮魂と鎮護国家のために、相輪つきの木製の三重塔（高さ二十センチメートル強）の中に、『無垢浄光大陀羅尼經』の中からいくつかの陀羅尼（サンスクリット語の真言）を選び、それを麻紙、黄麻紙、穀紙などの料紙で作った幅五センチメートル強の巻物に、真言の版を以て印刷し、塔の露盤内部に収め、百万基作って法隆寺や東大寺などの十大寺に、十万基ずつ奉納した、その陀羅尼のことだよ」

「大変有り難そうな話だな」

無関心な顔で叭羅蜜斗が言うと、普肅は笑い、

「話の肝はそこじゃない。

ちよつと待って」

普肅はいったん奥へ行きそして百万塔を抱えて持ってきた。

塔の中から帙紙に包まれた古色蒼然たる巻紙を取り出し、広げる。

「これをどう思う」

余白にこう記されていた。

「在らずに非ず、在るにあるや」

かすれた筆だが、明らかに後代に書き加えられたものである。それにしても。

「こんなものがうちにあったとはな」

「しかも、君の親父さんの話によれば、五百年くらいは動かしていない古文書類の奥から出て来たそうだ」

叭羅蜜斗は奇妙な表情を作った。

「おい、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツは五百年前に生きていたか」

「たとえ、生きていたとしても、日本には伝わらないだろう」

「確かに、謎だが、親父の言う、五百年動かしていない文書の奥つてのがどのくらい確かな話か
つてところがどうもこうも。見えたまま、経験のまま、思うところを言えば真実だというのは、
お目出度い大昔の私小説家丈にしてほしい、レフ・トルストイ翁の『戦争と平和』は作り話だと

というような暴言を言った奴のことだが。おまえの私小説よりよほどリアルだよと言いたいが」

「久米正雄のことは置いといて、君の親父さんの件について言えば、まあ、（失礼な言い方だが）それは言えるな。鵜呑みにすることは、少なくとも、科学的であるとは言えないだろうな。

いずれにせよ、これは僕の分野ではない。僕の仕事は芸術の味わいを囁み分けること、歴史の香りを嗅ぎ分けること、古書の耽読だ」

「確かにそうだな」

スマートフォンが鳴った。呱羅蜜斗が出る。

「おお、哥舞伎か。ふおうん、これも天の計らい、妙機というものか。縁だな。あゝ、いいとも。是非とも。もちろんだ、そういうことなら」

「相手は哥舞伎か。天之家の傾奇者、このタイミング、摩訶不思議、さあ、何を言ってきたんだ、いったい、どうしたんだ？」

「いつものことよ、太平常道、日常茶飯事、喫茶去き。真今のところにべ裂がいるらしくて、哥舞伎たちと龍吞村の蕎麦屋で落ち合うことにしたらしいんだが、俺らにも来ないかって電話だっ

た」

「何という天機、これはもはや運命か、好都合、こういう機会こそ日々好日と想いを為すよう心を鍛えよう。さても、万事よし、善き哉。しかも、哥舞伎の車ならば悠々だな」

「じゃ、早速支度するぜ。善は急げ、堂々果敢すべし。さあ、動こう。出掛けようぜ。とてもかくても、行こうぜ」

第十章 アトランティス

ざあざあとする雨を天然カルナバ蠟のワックスにより撥水する車のボディを眺めていた。それを見るためにわざわざ傘を差してである。

天之哥舞伎は自分の車に「アトランティス」と名づけた。意図は巨象である。或いは全世界であった。

森羅万象を乗せ、全てを備えて万能で、一切を網羅する、天網恢恢な自家用自動車である。

それは十二神将や四天王や明王や菩薩や仏をならべて世界一切を表現しようとする動機と似ていた。眞神の九人の聖者（むろん、自分も含めて）を乗せる車を造ることによって呪術的な実現を試みたのだ。

「もはや、正しいものは科学や論理や言説による考えではない。

超越的な覚醒と、物的な行為によって顕現する。新しい物質主義、新しい拝物主義。

無慈悲で無表情で、非情で無味乾燥で、無意味な事実である物質によってのみ構築される」

アトランティスはそういうコンセプトで構築されている。

十五人乗りのアメリカン・フルサイズのバンを千五百ミリメートルもストレッチして内外装や動力や足回りなどを改造し、ゆったりしたラグジュアリーな九人乗りに仕上げていた。九という中途半端な数は出入り口部分を二席外しているからで、基本的に五列で左右に一席ずつ、中央にペルシア絨毯を敷いた通路（これをグランド・ギャラリーと呼んでいる）がある。

中古車販売もしている哥舞伎が仲間を乗せるために詠えた特注車で、例えば天易真分専用の席

が決まっについて、サイケデリックと第二帝政様式が混ざったような内装になっていて、本棚が備えてあるとか。普蕭なら落ち着いたクラシカルな意匠風（中世修道院の図書館のような厳かな暗さがあった）になっているとか。

コノリー・レザーを奢った運転席には適切な角度をつけた七つものモニターがあり、背後や死角を映す三つのカメラの映像、ナビゲーション、オーディオとビデオ、テレビ、エンジン・コンディションが映るようになっていた。

天之哥舞伎はこれを名づけてアトランティスと呼んでいた。大型の自家用自動車を伝説上の理想の大陸になぞらえたのである。

アトランティスは真神文字で真兎を外装にデザインし、走ることで叡智を振り撒くという、チベット仏教のような発想をしていた。

さて、普蕭と叭羅蜜斗が乗ると、蕭々たる雨が強くなり始めた。動くと同時に窓を雨粒が撃つ。車中には、既に厳かに鎮座します白舟大樂がいた。

彼の実家は寺とは関係ないが、その名は『大樂金剛不空真実三摩耶經』に由来し、相変わらず

大食漢でもぐもぐ食べていて、葦草のように巨漢で、でっぷりとしている。

彼の室内装飾は原色鮮やかなインド風であり、そこに坐ると、まるでガネーシャのように有り難い存在に見えた。

運転席では、

「おお、龍神も我らを寿いでいるぞ」

哥舞伎がハンドルを切りながら天を仰いで言う。清水を泳ぐイモリのように龍神が曇天を泳ぐ姿が彼には見えているようであった。

事実を見ているようでいて、人は実際には思い込みを認知する。だが、目くじらを立てずに、人のそういう絡繰りを楽しむ彼であった。

傾奇者のように生きるよう願いを込められてつけられた名であった。華魁のような金襴緞子の着物をガウンのように羽織って、その上に豹の毛皮の陣羽織、リーヴァイスのパンツに獅子の鬘のような長髪、葉巻もパイプも使わず、煙管を傾ける。

雑入簀の街を出ると、もう住宅街で、それもすぐに終わり、畑や雑木林ばかり、鬱蒼たる樹木

でこんもりと起伏なす丘や水田の、さまざまな緑のハルモニアの景色。

もうほとんど信号機もなく、狭い路をすいすい進む。

目的の蕎麦屋は十字路の傍らにあった。精確に東西南北に走る路の交差する十字路で、沿道にさまざまな並木が植えられ、十字路の場所はちよつとした森だった。

北東側に道祖神があり、南西に店があった。ちなみに北西には環状列石があり、列石の中心には大きな平たい石があり、不思議な魔法陣のようなものが描かれていた。螺鈿や顔料や黒曜石などを嵌めた象眼の原始的なもので、複雑精緻なことから眞神曼荼羅とも呼ばれる。

南東には何もない。

眞神曼荼羅の真の意味と用途は不明で、古代から史書の続くこの一族には珍しい事であったが、般若心経の陀羅尼の意味が言われないのと同じような主意が含まれているのかもしれない。

「やあやあ」

「おお、いるな」

「待っていたぞ」

「さあさあ、早く。飲めや喰らえや」

店で合流すると、平衛隆臥も加わっていた。

実家は龍吞村にあるが、自身は龜鹽村の龜鹽湖の畔の農家の空き家を借りて暮らしている。仕事は農家の手伝いや隣に住む家主の差し入れと湖の水で生きていて、電気もガスも水道も使わず、生きている二十三歳である。

「そもそも惟笑や」

早速、百万塔陀羅尼を。

「これが謎か」

かんらから笑う真兮。

やや不満げの叭羅蜜斗。いつものことで慣れ切った普肅は、

「で、御大はいかに解く」

鬚を撫でて真兮は、

「小生が言うまでもない。この四辻の南東さ。隻手に訊けばわかる」

第十一章 隻手の声と現実性について

「隻手（片手）の声を利くとは、片手で為す拍手の音を聞け、ということらしいが」
埒が明かないので哥舞伎が隆臥に訊く。

隆臥は相変わらずぼんやりした表情で、

「誕生以前の記憶と同じです」

それに囁みつくのは叭羅蜜斗、

「生まれる前の記憶？ そんなこと言われてわかるか。あるわけないだろ。無だよ」

隆臥平然

「何もなかったけれども、無ではありません。無は（ない、なかった、ということも同じですが）
一つのかたち・様式・性質・特性を以て差異を成します。すなわち無ではありません。差異がな

いことは差異がないとは言えません。差異があるものとの差異があるからです」

「じゃ、何だよ」

「尾を噛む『原蛇の喩え』は永遠に解決しない。尾を噛む蛇は喰らうのか喰らわれるのか（むろん、四次元の世界ではあたりまえのように成立しますが、三次元の世界では絶対的に矛盾します）。

解決不能とはどういうことでしょうか。未遂不収です。未だ遂げず収まらない。

説明不能、現状放置です。現実其之俛げんじつそのままです。

現実其之俛とは、どういうことでしょう。かたちが決していないので、無辺です。

それは遍くすべての者に知られています。

遍くすべての者とは、何でしょう。

すべての人、哲学に興味のない人も赤子も、類人猿や犬や猫やイルカやクジラ、鳥や爬虫類や両生類や魚、草木や地衣類、オキアミやミドリムシやアメーバや細菌類やミトコンドリアやウイルス、鉱石や巖や水や雲、海や空や星や月等々はむろんのこと、空間や時間や幅や長さや三角形

や円など抽象的存在者さえも含み、無という存在者すら含む一切の存在者のことです。

それぞれ異なる知性の様式を持った一切の存在者が共通で知るような遍き知識は知覚によって認識できないでしょう。

すなわち誰もが知れるような事柄は、誰にも知ることができないのです。すべてに矛盾しない遍き内容を持つ知識は、差異の生じ得ない知識なので、知覚不能なのです。

本来、無_二空とは、現実です」

真_二今大いにうなずく。

「善_二き哉、善_二き哉。

眞神通史を知る者にとっては種も仕掛けもない。

何を隠そうか、『なにゆる_二在らずに非ず、在るに_二しあるや』とは、大化元年から天平神護元年

までを生きた眞神の哲学者、天平火空山在南の『穩渡_二炉邇』の有名な一説である。
あまひらかくやありなん おん_二とろじ

平清盛が東大寺を焼失せしめた時から十二年の後、この地に百万塔陀羅尼一基を持った僧が現れた旨の記述が『眞神公史』にもある。その際、受けた貞観正國寺の僧が火空山在南の研究家で

ありすとしてれす

名高い正見（俗名：同源有栖都手咽洲）で、それを書き込む可能性は大である。

ただの史実、ありふれた現実にはかず」

さすがの天平普蕭も呻く。

「まさか我が一族の筋のこととは。それを知らず気がつかずとは汗顔の至り」

叭羅蜜斗も又、頭を掻いて言う、

「それを俺と普蕭が持つて来てしまうとはな。こりゃあ、まったく縁だ」

第十二章 拾遺補註

普蕭は問う、

「我々の見る現象がまさしく真実であるという前提の下に言うのだが（つまり、見えている現実がそのまま現実であるとすれば、という意味だ）、我々の知性（感情も含めて）はニューロン

（脳神経細胞）の受容体に神経伝達物質が刺激を与えて、ナトリウムイオン、カリウムイオン等
のうちの特定のイオン・チャネルが開くことによって、特定のイオンが流入し、細胞膜内の電位
が負で、細胞膜外の電位が正で安定していたところに、イオンの濃度差が変化し、細胞内が正に
なり、細胞外が負になってしまうという、逆転現象、電気的な発火として生ずるインパルスにし
かずとすれば、いったい、知性とは何ら本質性のないもので、一つの感情や行動を促す効果でし
かないことになる。

知性は魂でも霊でもなく、科学的、物的な現象でしかないことになる。

されば、それも亦、無という概念にさえも縁もゆかり因もない、本質性に対して非情で無味乾燥な、

物的な、無の無なる空では」

真分は言う、

「まあ、それはそうだ。しかし、その難点は現象が事実であることを確認する方法がないという
ことだ。現実が見ているままとは限るまい。

ならば、そこまでしなくとも、よからう」

真兮はパイプを吸って吐き、

「そもそも、正しいとか、真であるとかいう考概の設定根拠、そのフォーム・かたちの決定や選定の理由及び方法、真偽止誤などの価値及び価値体系の構築の理由もその構造の決定理由もまったく明確じゃないとしたとき、もはや、それは問いになり得るであろうか。しかし又、それを問いたり得ないと決するのも、それに依存せざるを得ないのである。

これも『原蛇の喩え』のうち。

されば亦、未遂不収」

呵々大笑。

「しかし、これは決定でも結論でもない。

むろんだ。

未遂不収としか言いようがないが」

ちょうど蕎麦が来たので、議論は止まった。

そば粉を引くところから始めるので、時間がかかるのだ。待つ間、海苔をアテ（酒肴）にして

清酒を呷るのが慣わし。

さっさと食べ終えると、べ裂は淡々と窓枠に肘を乗せて雨を見ていた。

雨は再び弱まり、蕭々としたものとなっている。

草の匂いや土の匂いが漂っていた。緑が甦る。

「皇月つてのア、いい月だなあ。まったく以て好い世の中になったもんだ。

江戸幕府斃れて明治政府になって以来、時節を見抜いて、予め結んでいた長州藩との協力体制や、明治政府への資金供与や取引のせいもあって、また大英帝国や露西亜帝国、亜米利加合衆国との密約の効果も伴い、どうにか尖刀石山を出て、また眞神の御山を拝することができるようになった。

それで大和朝廷への義理も立ったし、眞神を護ることもできたってもんだ」

叭羅蜜斗が呆れ顔で問う、

「何を今さら百六十年以上も前の話を」

「いやさ、なあに、どってこたあないのさ。

ただ、坂本龍馬に感謝したいと思ってな。日本の黎明は、眞神の黎明でもあった。いや、彼の命を賭した努力は人類の金字塔の一つだ。龍馬の龍は龍育の龍でもある」

天平普肅は思料する。

誰もが知る、いかなる存在者も理解している、それゆえに、誰も知ることができず、いかなる存在者も理解できない、理解の仕方がなく、理解できないことが不可能な真理とは、いったい。

しかも、そもそも知性はインパルスという化学的な現象でしかなく、物的な現象でしかないというものをどのように理解すべくもなく、誰もが知る、いかなる存在者も理解している、それゆえに、誰も知ることができず、いかなる存在者も理解できない、理解の仕方がなく、理解できないことが不可能也、としか言えず、放置、現状のまま、未遂不収、もはや、とてもかくても候、なレベル。

そうでなくとも、我々は実際、事実を見ているのかどうか、定かではない。構築（捏造）された現象を観ているとも言えるが、それなれば、それゆえにそれも亦虚し。

知性が化学的現象である、という事実も定かならず。

もしも、それが定かであったとしても、それらは考概たるのみにて考概にしかず、実存的には納得という、心的な現象にしか我々には見えない。観じられない。Logicalに思考する限りに於いては。

我々にとって実存的にLogic（意識、又は考概）以外に何があろうか。それしかない。それ丈、それ耳。それなのに。

Logicというものの（又は者。一つの存在者だから）の原蛇的な性質、構造、仕様はどうにもならなく決定的だ。

結果として、一切が、唐突、としか見えない。経緯も、いわれもなく、ぶっきら棒、無味乾燥、無表情、非情、粗い、表層的な、即物的な、感覚。それ（そういう批判）も、所詮は感覚、考概だが。一つのフォルム。

経験によって観照した事象を、直観する感覚に沿って（いるつもりで）、その受け止めた現象のまま、自分の想う處のありのままに書けば、真実だと言う、お目出度いバカな流派がかつてあったが、事実をそのまま書ける人など、いるであろうか。

或いは、書けない人がいるであろうか。何を書こうが、書くまいが、真実とは言えまいか。事実を見たまま、と言う人は、事実を見ているという保証を、どこから得ているであろうか。又見たままに書いているという保証を、どこから得ているであろうか。直観として受け止められている（と思われる）現象を、その直観のままに受け止めることが真実であるとは、どうして言えるであろうか。我々人間はすべて証明されてもいない無数の定理を、無条件では認し、さまざまなこと特定し、決めつけ、判断している。

いや、そもそも事実って何だ、直観って何だ、保証って何だ、真実って何だ、証明って何だ、無条件って何だ、是認って何だ、特定って何だ、決めつけて何だ、判断って何だ、特定って何だ、ただ納得がある丈。すべての考概は辣韭のようなものだ。で、納得って何だ？ 無理解ですらない？

AがBであるがゆえにCである、犬は乳を飲ませるゆえに哺乳類である、的な型。それが方程式である。さようなものが成立する根拠、経緯、理由、意味を知らない。経験に合うからか？ しかし、合うとは、何であるか。あゝ、Logicよ、あなたの名に於いて鑑みる限りに於いて、我ら

は何も知らない。

AがAであることの、判明正解真実の睿断たるを求究するLogicはその形状に於いて、未遂不収に到達せざるを得ない。

又それ以前に、思考一切はインパルスだ。もし、我らの観察と理解のとおりならば。

そんな物的な現象に、何かを求める方がおかしい？ いや、それもLogicだ。化学的現象に本質（イデア）性は内在しない、人の聖なる魂はない、人工知能には心がない、という判断・批判のすべてが。

慮れよ。思料せよ。

仏陀は不死であるという。しかし、釈迦は病に罹り、苦しみ、「喉が渴いた。水が飲みたい」と渴きを訴え、肉体は苦しみ、斃れ、死した。

生きて死ぬこと。それが解脱だ。現実しかない。欲しけりや手を伸ばせ、嫌なら止めろ、止めたら後悔するかもしれない。無空と言え、無空だ。無空と聞くと、行為をしないことかと尋ねる人もいるが、行為しないことも、行為の一つだ。Logicの上では。何か行為をしたって、間違い

でも、正解でもない。又は、どちらかである。

真実がない。だから、真実じゃない。真実丈があるという、現実しかない。

心の機らきに応ぜよ、ロゴスに聴従せよ。

だが、天易真兮は面倒臭い議論を一笑し、言う、

「理論は兎も角、実務に就いて言えば、間接だから、そういう面倒が起こる。直截にすればいい、描写じゃなくて」

「直截？」

「例えば、だ」

BluesHarpをジーンズのポケットから出し、ベンディング bending. ベンド奏法。ハーモニカに於いて、強く吸うことによつて音を下げる奏法）しながらスライドさせ、強い音を出した。

「このサウンドについて、もし小説などで言及しようとするなら、現象として直観されたものを言葉で置き換えて描写し、小説とするのではなく、音という、事象そのものを直截、そこに置いて小説とすれば、我々の直観上又は現象上は、真か否かの問題は起こらない。事実そのものだ。

トルストイの『戦争と平和』を『偉大は偉大だが、偉大な作り話だ』という頓珍漢な批判をした久米正雄も満足するであろう」

「しかし、君の言い方で言えば、頓珍漢なんて、路傍の石みたいなもので、それもよし、つてなもんだとも思うが。

そもそも、言語表現でなくては、小説ではないとは思うものの、まあ、そういう骸殻を突き破ったのだということにして、話を進めるとしても、それで（事象そのものを置いて）、いったい、何になるんだ」

「さあね。現実問題なんだから、都合のよい答なんざないよ。だから、Blues harpなのや」

という、日常茶飯のごとき卑俗物的な、常套句的セリフを、敢えて（のように想えた丈だが）彼は言った。

完